

戦い、遂に全員戦死したという歴史ののこるカイ・バングラチャンの古戦場を訪ねた。ここは現在ボーイスカウトの訓練キャンプになっている。この戦跡を永遠に記念するため、現在勇敢な民兵たちの碑を建設する準備が進められている。

23日の夜8時から、県視学官のタウン・タクンシー氏による「チャイナートの民俗芸能」という講演を聴いた。タウン氏は現在チャイナートに伝承されている芸能を(1)民謡、(2)遊戯、(3)なぞなぞの3種に分類し、これらがシンブリー、アントン、ウタイターニー、ロップリー、アユタヤ、スパンブリ等と共通している点を指摘した。中学校高学年の生徒による実演を交えながらの巧みな解説に夜のふけるのを忘れる思いがしたものである。

2月24日(金)、セミナー最終日は会場も県庁会議室に移し、閉会式にふさわしいformalな雰囲気があった。10時15分チャイナート県知事の「今日のチャイナート」と題する特別講演、これに続いてタニット・ユーポー芸術局長の閉会の挨拶をもって、5日間にわたる「サマナー・ポーランナカディ」は無事終了した。

おわりに

今回のセミナーは純然たる国内セミナーであったので国外からの参加者はなく、外国人は私のほか Siam Society の Mr. J.J. Boeles, タイ美術史研究家の Mr. A.B. Griswold, 医科大学の Victor Kennedy 講師らが討論に加わったにとどまった。しかしタイ人の参加者は多彩な顔ぶれで上にあげた学者の外、チュラロンコン大学、芸術大学、チェンマイ大学の関係者、芸術局専門家の大半が全国から集められており、タイ国の「ポーランナカディ」の現状を知る上に大いに有益であった。わたくしのセミナー参加についてお世話下さった芸術局のソンポン・シーサムラン氏、国立図書館のメンマート・チャワリット女史に厚くお礼申しあげる次第である。

インドネシアに学んで

崎 山 理

I シスワ・ロカンタラ財団

東南アジアにおいて今もなお最も目まぐるしい動きを続けるインドネシアに私が滞在したのは、1964年9月から1966年10月までの約2カ年である。この間に私はマレーシア対決、国連脱退、9月30日運動、平価切下げ等の矢つぎ早に起こる政治的事件を身をもって経験し、また、それによる影響が私の滞在目的にも及んでその目的の変更を余儀なくされる場合も起こったのである。私の渡航はインドネシアにおける唯一の組織的な外国人学生招聘機関、シスワ・ロカンタラ財団の選考に合格して許可が与えられたものであるが、この財団の存在については日本であまり知る人もなく、まず簡単にその紹介をしておく。ただし、断わっておかねばならないのはインドネシアには「××財団」という少人数で運営されている財団が数多くあって、財団という名称から決して欧米の、またわが国のそれを想像してはならないのである。組織は援助資金財団(全インドネシア向けの宝くじを販売し、その収益は社会建設にまわす。総裁はスカルノ大統領)の傘下にあつて、資金源としての月々の予算は全くこの援助資金財団に頼っている。このシスワ・ロカンタラ財団の目的とす

るところは友好国の学士級以上の志願者に対して、社会科学、文化、言語、身体障害者リハビリテーションの4部門において与えられる。原則として期間は1カ年であり、1カ年経過しても研究者の事情によって延長可能である。私の滞在中、ジョグジャカルタ近郊の農村に住みついてフィールドを行っていたスウェーデン王立博物館からの文化人類学専攻学生は3年半の長期にわたっていたし、また、タイからの留学生はインドネシア大学法学部の正規の課程を終えるため4カ年の許可が与えられていた。留学生には研究方法上で特に制限はなく、大学で聴講生となってもよいし、また、フィールドを行ないたい場合それも事情を酌量して許され、財団が各地でのあつ施の労を取ってくれる。年ごとの採用数も一定しているわけではなく、アパートの収容力にも限度があるのでアパートがふさがっている限り採れないということになる。ちなみに1957年から1960年までわずか11名（このうちで英国人が5名を占めるが、1963年9月の英国との国交険悪化以来、英国人の採用は中止された）を受けいれているにすぎない。私の滞在中、出入した学生はアメリカ2、オーストラリア2、スウェーデン1、アルゼンチン1、タイ1、日本1であった。留学生の条件として英語の十分な能力を持つことが必須とされるが、インドネシア語の知識は別に要求されているわけではない。インドネシア語の習得のために到着後、財団がインドネシア大学留学生別科へその学生を送り込むか、またはアパートで行なわれる週3日のインドネシア語講習会に出席させられる。私が到着した時、後に初等文化教育副大臣になったモハメッド・サイド氏が授業に当たっていた。学生の能力にもよるがだいたい3カ月はこの講習を受けなくては外へ出してもらえない。また、3カ月ごとに研究経過報告を、そして帰国前に最終報告を提出しなければならない。留学生

には住居（3食、洗濯、掃除付き）の保証があるほか、審査された上で必要な図書購入費、医療費、財団の承認を得て国内を旅行する場合その交通費を支払ってくれる。そのほかに月々小遣いが支給される。これは全くわずかであって頼りとはならない。インドネシアのインフレーションは私の滞在した約2カ年の間にアメリカドルに対しルピアの絶対数がちょうど百倍になったが、このような経済状態の中にあって、例えば財団の職員の平均給料は闇相場で換算するならば月10ドルを上らず（コメは別に支給される）、これを生活費のすべてにあてているのである。だからインドネシアの給料生活者でアルバイトをしていないものはない。（ただしこの数字を見てその生活を悲惨というのは当たらないかもしれない。ぜい沢品を別にして、それなりの欲望を満たしてくれる商品が悪くともべらぼうに安く売られているからである。）これから見て小遣いの額が想像されるであろう。しかしインドネシア人側からすれば妥当な線なのである。ただし必要な資料を十分に集めたり、国内の旅行のためにはどうしても自費は用意していなければならない。

財団の規定している諸規則もいったん入団してしまうと、非常にゆるみがあることが分かったが、それは財団の規模の小ささにもよる。この小ささが、ある場合には家庭的という点で便利になり、また、かえって不便になることもある。財団の人事は長のアンワール・チョクロアミノト氏（インドネシア回教連盟党党主）、副長、会計書記のアリスムナンダール氏、その他顧問として4名のメンバー（その中の1人はインドネシア大学文学部教授スチプト・ウイリヨスパルト博士）および3名の事務員から構成され、月に1度定期会議が開かれるほかは、学生への采配はほとんどアリスムナンダール氏によって振るわれ、また、アパート（ジャカルタ郊外の閑静な住

宅地新クバヨラン地区にあり、6名収容できる。1人1室のモダンな建物での住み心地は悪くない)に隣接して氏の住居があるため、氏および家族との接触具合が学生にとって重要になる。

ジャカルタから離れて地方で生活したい場合も上記の会議で決定が下されるが、許可されると、地方の希望地での民家を下宿としてあつてくれ、また、すべての必要な生活費は負担してもらえる。しかし外領に出ることはほとんど不可能でジャワ島内に限られそれも大都市でないと難しい。というのも国内のトランスポートーション、通信の悪さに、一応身元責任者である財団側が心配してのことであり、また、地方においてインドネシア人と外国人との間のトラブルを極度に警戒しているからであった。なお、当然のことであるが、インドネシア語の能力不足の場合、絶対に出してはもらえない。私は幸いに中部ジャワのジョグジャカルタでの生活を許可されたけれども、折しも国内の政情が騒然としてきて、私の滞在中は私がその最後の許可された者となった。

II 渡航目的—地方語習得、文献調査

私の渡航目的はインドネシア語のより深い研究のほか、インドネシアの地方語の現状を調査、習得することであった。また、未調査の地方語も数多くありオランダ人によって比較的多くの業績が残されたのはスマトラ、カリマンタン、ジャワ島、バリ島に限られ、セレベス、モルッカス諸島にいたってはほとんどまだ手がつけられていない。しかしこの地域に行なわれる言語はインドネシア語派とメラネシア語派との中間に位置しているところから、この両語派が同じくオーストロネシア語族に分類されているとはいえ、その形態論的な相異が発生的系統的関係を明らかにするために飛躍がありすぎるのを何とかうまく繋

ぐような特徴を持った言語の存在を仮定させるのである。ジャワ島内部にも未調査の西部ジャワ南バンテンの山中深くに住むバドワイ人(人口約2千といわれ、非常に排他的)が居るし、東部ジャワでもブロモ山麓にバドワイ人に比べればその未開性は減るテンゲル人(人口約3万、オランダ時代からその高地を利用して都市用の野菜栽培を行なっている)がおり、いずれもイスラム教進入後山中へ逃げたジャワ人の一部であるといわれ、原始ヒンズー教とアニミズムの混成宗教を持つらしい。彼らの言語は古代ジャワ語の特徴を保ち、伝えているかもしれない、その点でもぜひともできれば調査を行ないたい言語であった。

しかし渡航してみて初めて財団という枠の中にいながらそういう調査を行なうことの難しさを知り、またそういう準備のための十分な期間がジャカルタや現地において必要なため、私の最初の滞在期間は1カ年しか与えられていなかったから、より効果的に研究の進められるジャワ語へとその方向を定めたのである。

ジャワ語についてわが国ではほとんど問題にされず、また、研究書としてほとんどないというのが現状であるが、インドネシア人社会におけるジャワ人の優勢はその言語にも及び、ジャワ人以外でもジャワ語を習得しようとする傾向が見られたし、また、中・東部ジャワではジャワ語の出版物(雑誌、単行本)が相当量に上る。小・中学校でも正科としてジャワ語が教えられており(ただし、バリ島ではバリ語、マドウラ島ではマドウラ語、西部ジャワではスダ語がそれぞれ教えられている。しかし外領ではインドネシア語のみで、地方語を教科に取入れていない。もっとも地方語教授の必要性は初等文化教育省の学習指導要綱に示されており、高等学校の文化コースでは2・3年に対して週2時間の地方語の授業が選択科目としては入っている)、また、ジャ

ワ語の持つ表現法、語彙の豊富さがどんどんとインドネシア語に取り込まれていくのを目の当たりにしたのである（私の滞在中にも、plin-plan<日和見主義者>、antek<手先>等がインドネシア語の中に加わった）。私はインドネシア大学文学部インドネシア文学部に聴講生として席を置いていたが、同時に文学部の理事の1人から財団の世話によってジャワ語の個人教授を受けた。もちろん、文学部の中に地方文学科がありジャワ文学専攻、スダ文学専攻のコースがあるけれども、能率の面でそこには席を置かなかった。一方、ジャワ語と並行して古代ジャワ語（カウイ語）の研究をも進めていった。カウイ語はインドネシア全土においてちょうどわが国の古文のような意味で教えられ、高等学校の文化コースでは必須科目である。カウイ語はその大きな文学的裏付けとともにインドネシア人の精神的糧となっており、その文学の翻案されたワヤン（影絵芝居）はほとんど全インドネシア人に嗜好されているにもかかわらず、わが国ではまだその研究にまでいたっていない。私はさらにジャワ語、カウイ語の研究を継続するために中部ジャワのジョグジャカルタでの滞在が許可され、ガジャマダ大学に席を移した。財団がもう1年の延長を認めてくれたのは幸いであった。博物館、図書館、大学へ通うための交通の便の悪さおよび午後1時までしか開館しないという時間的制約から、効果が思うように上がりず多少あせりがあったからである。また、ちょうど1年たった頃、共産党の勢力の増大に伴う9月30日運動が起こり、各地からのニュースは情勢の悪化を告げるものばかりとなり、完全にジャカルタに足止めされる状態となってしまった。しかし後にジョグジャカルタへ行って見て、町は平静そのものであり、そのようなニュースがいかに針小棒大に伝えられたかを知って、コミュニケーションの悪さの犠牲になったことに

苦笑した次第である。

さて、地方語の言語調査のほうも放棄してしまったわけではない。しかし財団からはジャワ島以外の外領へそれも長期にわたって滞在することを許されず、結局、1964年暮から翌年にかけて渡来した厚生省のインドネシア地域日本人遺骨収集団から通訳を依頼されたのを利用して（もちろん、この時は財団の責任から離れてという意味である）、セレベス島北部のメナドでトンセア語、また、モロタイ島（モルッカス諸島の最北端、また、インドネシア領の最東北端の島）でサンギル語を調査することができた。この島はメラネシア語域に位置するパラオ島に最も近いことからその言語には大いに期待を抱いたが、この島はオランダ時代まで無人島であったこと、後にアンボン島、西向かいのハルマヘラ島、西北のサンギル・タラウド島からの移民が行なわれ、人口は約2万ということで、結局、調べ得たサンギル語からは先に述べたような手懸りを得ることはできなかった。サンギル語はその特徴をもってしてはやはりインドネシア語派に属するとしかれない。

次に、文献の調査のためにはジャカルタでは旧バタビア博物館、国民博物館にオランダ時代に出版された書物はほとんど備えられてあり（もっとも前者は整理中で後者に統一させるといふ）、約70万冊という。ジョグジャカルタではソノブドヨ博物館でやはりたいいのものは探し出すことができた。ただし複写設備はないから、その準備をしていなかった私は後悔した。また、古書店に関しては東南アジアでは最もその数が多いように思われ、時に、貴重な書物に巡り合わすこともあった。しかしまだまだ価値ある書物も残っているようで、アメリカから国会図書館の係員が現地に滞在してそれらの書物を買集めているのは興味をひいた。この点わが国でも考えられるべきではないか。いま、集めておかないと

百年の悔を残すことになるかもしれない。私の場合は、日本ではジャワ語、カウイ語の文献的知識すら十分に得られず、現地についてから目録作りを行なうようなことになったが（もっとも最近、オランダ国立言語地理民族学協会の Bibliographical Series No. 7 にジャワ語、マドウラ語の文献解説集が出た）、特に人文科学系の専門によっては文献を現地で初めて見なければならぬ場合も多い。また、オランダ語の知識が必要なことはいうまでもない。

Ⅲ 学 術 団 体

最後にインドネシアの学術団体について簡単に述べておく。ちょうどわが国の学術会議に相当するものとして、インドネシア学術会議（通称 M.I.P.I.）があり、これは1956年3月に創立し、工学・数学・自然科学、生物学、医学、文化、法律・社会・政治・経済の5部門に分けて、諸学の高揚のほか政府に対し学問的立場からの助言を行なうという主旨のもとに、第1回の1957年1月のバンドン大会では国家経済を高めさせる5カ年計画を打出したが、その後この計画も立消えとなってしまったらしい。しかし定期刊行物として続けて出されているものに *Berita M.I.P.I.*（季刊、1957年～。M.I.P.I. ニュース。国内、国外の学術的動向を掲載）、*Indonesian Abstract*（季刊、1959年～。前年のインドネシアで発行された各種学術雑誌から主要な論文の紹介）、*Bulletin*（年刊、1959年～。前年度発行のインドネシアにおける全学術雑誌の論文の分類別総目録。その No.2〔1959年〕ではインドネシアの全学術団体をバンドン、ボゴール、ジャカルタ、ジョグジャカルタ、マカッサル、メダン、スラバヤの各都市ごとに紹介した特集号）、*Medan Ilmu Pengetahuan*（季刊、1960年～1962年。学術広場。学術論文集）があり、現在の情勢を知る上に役立つ。

インドネシアの学術団体の組織の組換えは

極まりない。それは省についてもいえることだけれども、一見合理的に非常に細かく組織化する一方、結局、計画倒れとなり、また、次の組換えを行なうということがひんぱんに行なわれている。（もちろん、経済状態の不安定さがその原因であることも考慮しなければならない。）例えば、私に関係する言語文化協会は1946年の言語文化調査協会がその源であり、1952年にそれは教育文化省文化課言語局と合併してインドネシア大学文学部附属言語文化協会となり、1959年に再びインドネシア大学から引離されて言語文学協会という名称のもとに教育文化省の直轄下に置かれ、さらに初等文化教育省の直轄に移行された。1964年にこれが一般教育課インドネシア地方語教育部と合併し支部がジョグジャカルタ、シンガラジャ、マカッサルに置かれたという具合である。この言語文化協会の業務は、(1)インドネシア語地方語文法の調査編成、(2)語彙問題、(3)現代インドネシア文学の調査編成、(4)古代文学の調査編成、(5)地方語文学の調査編成とインドネシア語化およびインドネシア文学の地方語化、(6)インドネシア語地方語辞典、百科辞典の編纂、(7)マイクロフィルムの作成、となっているが、その成果としては、ジョグジャカルタ支部で発行した最もポピュラーなカウイ文学「アディパルワ」の原文対照インドネシア語訳2巻、ワヤンの解説書若干、また、ジャカルタではジャワ語、マドウラ語の教科書を発行したにすぎない。また、計画によると地方語の中でアチエ、シマルンゲン、バタック、ミナンカバウ語（以上スマトラ）、スンダ語、ジャワ語、バリ語、（以下セレベス島）ブキズ、マカッサル、トラジャ語の調査の対象として選んでいるが、それが実行されたことをまだ聞いていない。

以上まとまりがなくて恐縮であるが、何かインドネシアを理解する助けにでもなれば幸いである。